



Title	織物以前のこと : 織物以前の豊かな布・装飾文化
Author(s)	福本, 繁樹
Citation	デザイン理論. 2016, 67, p. 96-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56352
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

織物以前のこと

— 織物以前の豊かな布・装飾文化

福本繁樹／大阪芸術大学

「染織」の歴史といえ、最近まで織機（はた）の発明から始まるかのようかに説明されていた。織機発明以前にも、豊かな布文化が発達していたと思われるが、織物以前の布や服飾文化が如何に豊かであったかを知ることが難しく、考古学的証拠も乏しく、今日の我々が眼にするのは織布がほとんどで、布イコール織布という認識からも、そのようなこととすまされてきたのだろう。しかしそれは、服飾文化や、デザイン意匠の由来や原点を考えるうえで、重大な欠陥となっているだろう。

そこで今回は、「織物以前の豊かな布・装飾文化」と題して、「豊かさ」を少しでも理解いただきたく、たくさんの図版を用意した。また、パネル展示ではその研究発表にかかわるオセアニアの参考資料を十数点展示した。作品ではなく資料の展示は、あるいはパネル展示企画の趣旨にはずれるかとも考えたが、映像や言葉のみではなく、実物資料とともに研究発表することも大切と考え、勝手ながらこの機会を活用させていただいた。

研究発表には、「織布と編布」「オセアニアの染織」「タパ（樹皮布）」「カジノキの不思議」の四つのテーマをとりあげた。

「織布と編布」については、考古学の成果による最古の織り布、不朽しやすい繊維や布は考古学的資料にとほしいこと、織布と編布の区別の難しさなどを示し、今後の考古学の発展によって、織布と編布の歴史はさらに古いものと考えられる可能性についても述べた。近年に明らかにされてきた縄文時代の編布と、全国の寺院に伝えられた16世紀以来の一遍聖人や時衆の阿弥衣^{あみえ}、そして明治まで伝えられ

ていた越後アンギン（編布、編衣）が、ともにもじり編みという同一組織のものであることなどから、編布は少なくとも縄文時代前期（約7,000～5,500年前）にまでさかのぼることが明らかにされている。しかし「織物以前のこと」は、国内資料だけでは乏しく、オセアニアの染織文化を視野に入れるなど、考古民族学的考察が有効である。

かつて織物文化は、インドネシアからミクロネシアへ、そしてメラネシアの一部に伝えられ、ポリネシアへは伝えられなかった。メラネシアにみられる織物は、サンタクルズ島（1973年当時3人の男が織技術を伝承）、バンクス諸島（近代に消滅、大英博物館に遺品を収蔵）、シカイアナ島（1982年当時3名の女が織技術を伝え、妊婦帯のみに使用していた）などの地域にしかみられず、オセアニアの織物文化は例外的なものだった。そのかわりに織布の先駆材料と考えられる編布やタパ（樹皮布）など、豊かな染織文化を今日に伝えている。

ヴァヌアツ共和国中部のペンテコスト島などに伝えられているパンダヌス布は、世界の染織の常識をくつがえすユニークなものである。オセアニアには、絞り染めはないとされ、織物以前に防染技法がないというのが定説になっていたが、パンダヌス布の編布には、きわめて複雑多様な組織がみられ、そこに防染による棒締め染めによって氏族に伝えられた紋様がダイナミックに染め抜かれている。

また、数千年以上の歴史があると考えられているタパ（樹皮布）がオセアニア各地に伝えられ、地域によってユニークな発展をとり、クライマックスの様相を呈している。たとえ

ば、紙と類似する、精巧な品質のインドネシアのスラウェシ島中部、技術的に高度な発達をとげたハワイ、素朴な品質に複雑な氏族の伝説を多彩な紋様に伝えるニューギニア、端正な施紋のフィジー諸島、巨大なタパを精力的に生産するトンガなどなどである。

タパについての研究者は世界に乏しいが、近年台湾とインドネシアがタパについての研究プロジェクトを積極的に推進している。2013年9月にジャカルタで、国内13の博物館や研究機関が連携し、筆者のオセアニアのタパコレクションをあわせて「Fuya & Tapa: Bark Cloth Traditions in Indonesia and Oceania」が Museum Tekstil Jakarta, Bentara Budaya Jakarta で開催された。

タパの研究者は日本でも少なく、かつてタパが日本で作られていたかどうかは確認されてない。しかし正倉院にタパそのものと思われる「ゆふ（木綿）」が伝存する。カジノキの樹皮をシート状にのばしたもので、幣^{ぬさ}として神事や祭のとき^{さかき}神にかけて垂らすなどに用いられていたという。

そのカジノキ（梶）には数々の不思議がまわりつく。今日ではたいした役にもたたず、庭木としては嫌われ、各地で姿を消しつつあるカジノキではあるが、神道では神聖な樹木のひとつで、神社の境内などに多く生えられた。諏訪神社などの神紋や日本の家紋としても多く描かれている。七夕祭に葉に直接「歌」をヘラなどで書きお供えした。現在では七夕はササに飾りをつけるが、昔は、梶の葉や枝をもちいた。宮中での七夕飾りや冷泉家に伝わる「乞巧奠」（きっこうでん、ほしまつり。陰暦7月7日の七夕儀式）には、牽牛、織女の二星（たなばた）に、種々の供物をし、蹴鞠、雅楽、和歌などを手向けて、その技が巧みになるように祈る。カジノキは枸・加地乃木・加知之岐・梶木・楮・構・構木・穀・

紙木（植物名辞典）など多くの表記があり、とくに「梶」がわざわざ国訓なのは、カジノキが特別に扱われたことを示唆するようだ。

カジノキについては柳田國男の指摘が注目される。次にその一部を引用したい。

藤葛または「いぬからむし」などのほかに、なお衣服の材料であったかと思われるのは楮^{こうぞ}である。『阿波志』にタフの原料として穀^{かじ}の皮を用いたというカザも、今のヒメカウゾイゾか、そうでなくともこの属の一種であったろうと思う。是は我々の最も注意すべき点で、（中略）結城のユフは一種麻以外の繊維料で、それは穀のことだということが古く認められていたのである。（中略）ユフの使用は今日は神祭に限られ、それも代品ばかりで何が本当のユフだとも知れぬようになっているが、我々の祖先の思想としては、神に供えるのは各人常用の必要品のなかでも優等なものを選ばなければならぬのであったから、すなわちまたユフと訓まれた昔の木綿^よが、今のモメンの木綿と同様に、衣服の資料であったこともほぼ明らかなのである。（中略）下総の結城を筆頭にして、ユフの産地を意味する地名は、国の東西に分布している。（中略）近くは武蔵の一国だけでも、自分はその十数カ所を列挙することができる。（中略）麻が唯一の平民衣料となったのは、中央部においてもそう古くからのことではないのである。（『木綿以前の事』1979、底本は1939年創元社版）

柳田國男の『木綿以前の事』に啓発され、かつてこの日本でもカジノキからタパが盛んに作られたのではないかと考え、今回の研究発表の題目を「織物以前の事」とした。